2010/03/24 MP,BP,GP：コイララ３兄弟
2010/03/22 インド・マオイストの24時間バンダ
2010/03/20 マオイストと闘うインド内務省
2010/03/20 公衆トイレと公共の観念
2010/03/19 ガンジーの偉大さと池田大作氏の名声
2010/03/18 インド国鉄vsデリー地下鉄
2010/03/17 美しく管理されたデリー大学
2010/03/13 ジハードより危険なマオイズム：インド内務相
2010/03/13 鉄柵の地域自治
2010/03/12 治安コスト：厳戒デリー地下鉄
2010/03/11 社会主義健在：ネルー大学
2010/03/10 33%賃上げ：デリー
2010/03/09 建設ラッシュのインド
2010/03/08 インドは「女性の日」
2010/03/07 マオイストTシャツ
2010/03/06 ネパール派兵、７月末まで延長
2010/03/04 社民党とネパール
2010/03/01 ノルウェーとネパール：表現の自由をめぐって

2010/03/24

MP,BP,GP：コイララ３兄弟

谷川昌幸(C)

ギリジャ・プラサド・コイララ(Girija Prasad Koirala)氏が３月２０日亡くなられた。ガネッシュマン・シン氏逝去の際はカトマンズにいて，葬儀の様子を見守った。今回はデリーにいて，ＧＰ氏逝去を知ったが，デリーでは見た限りほとんど反応はなかった。力関係からして仕方あるまい。ガネッシュマン・シン氏の場合と比較して，ネパールの人々の反応はどうだったのだろうか？

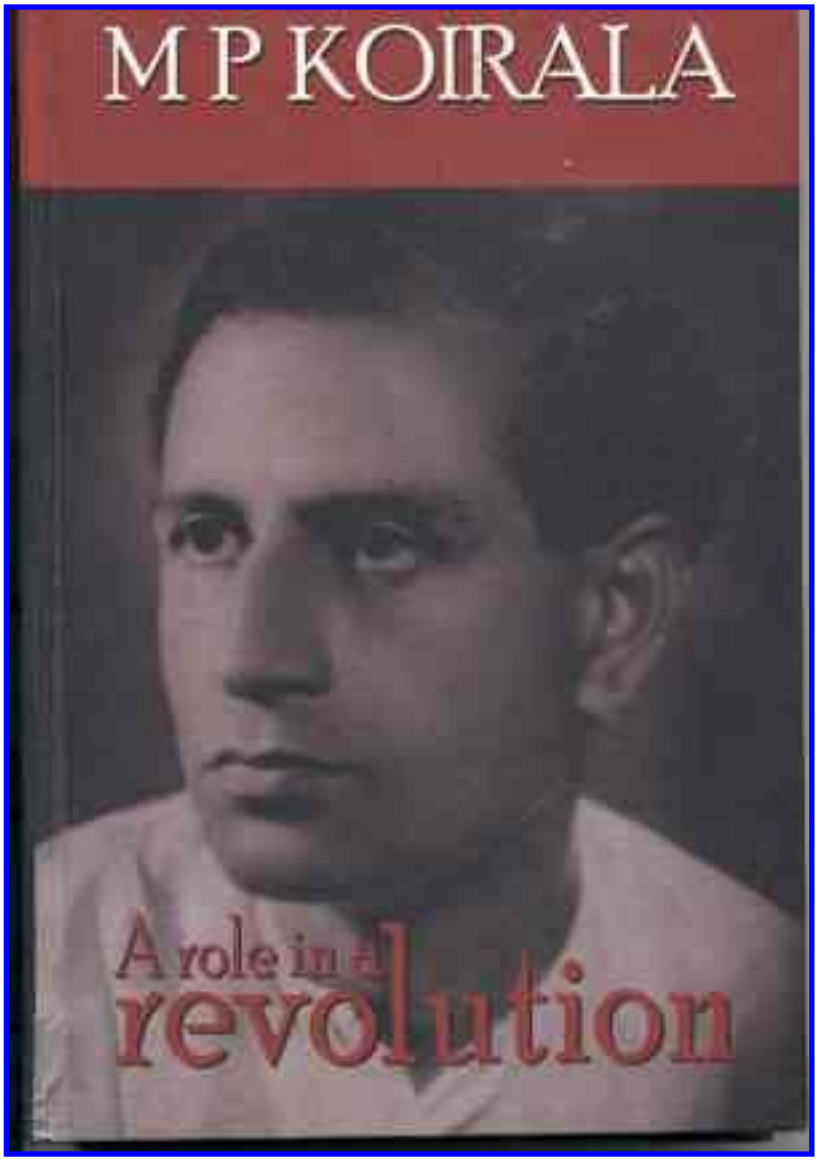
ＧＰの父クリシュナプラサド・コイララは，二人の妻との間に６男４女をもうけた。成人した５人の男子のうち，長男ＭＰ(1912-1997)，次男ＢＰ(1914-1982)，そして６男のＧＰ(1925-2010)が首相となった。もっとも有名なのはＢＰだが，ＭＰもなかなか優秀だったそうだ。コイララ家はたいへんな名家なのだ。

ＧＰはノーベル平和賞に推薦されていた。マオイスト人民解放軍が国軍に統合され，新憲法が制定され，平和構築が予定通り進めば，これは国連平和構築のモデル・ケースたりうるから，ＧＰ氏にノーベル平和賞が授与される可能性は十分にあった。

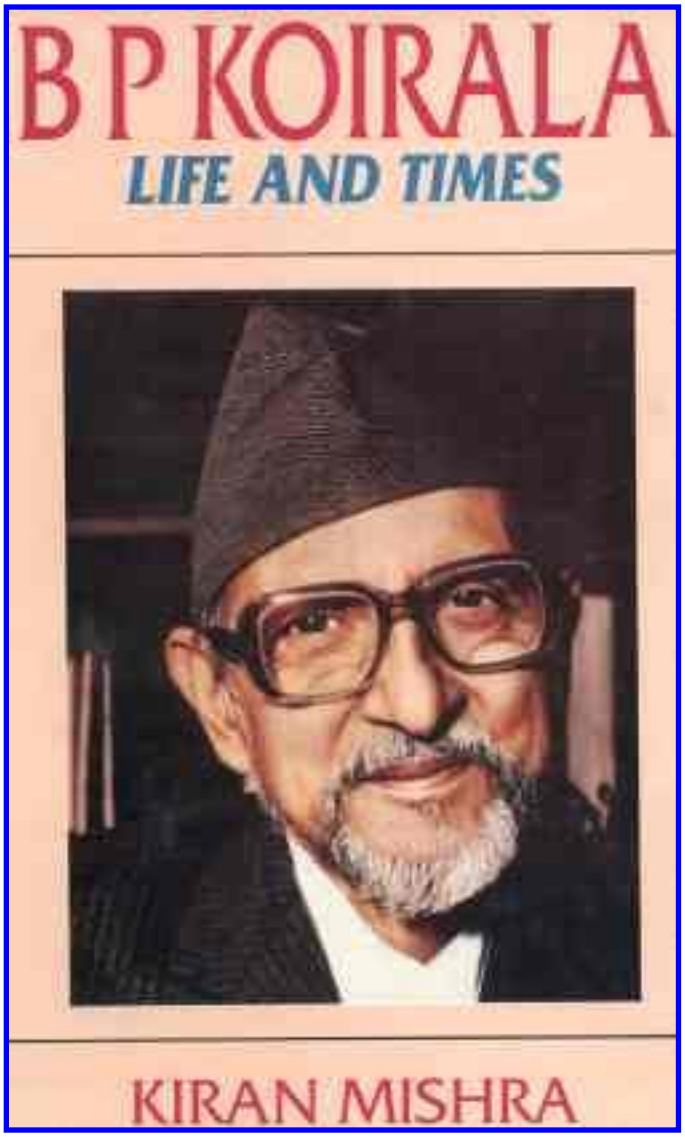
ＧＰ逝去は，少し早すぎた。ネパール平和構築のためにも，ノーベル平和賞のためにも。

＊2009/06/18　皆さん，よい人なのに・・・・

ノーベル平和賞推薦記事の挿絵(KOL, Mar24)



ＭＰの文章を編集したもの（2008年刊）



ＢＰは共産党各派からも尊敬され，伝記・研究書多数。本書は1994年刊。

出版年なし（2008年？）

20:53 | 固定リンク | この記事を引用 | 政党
2010/03/22

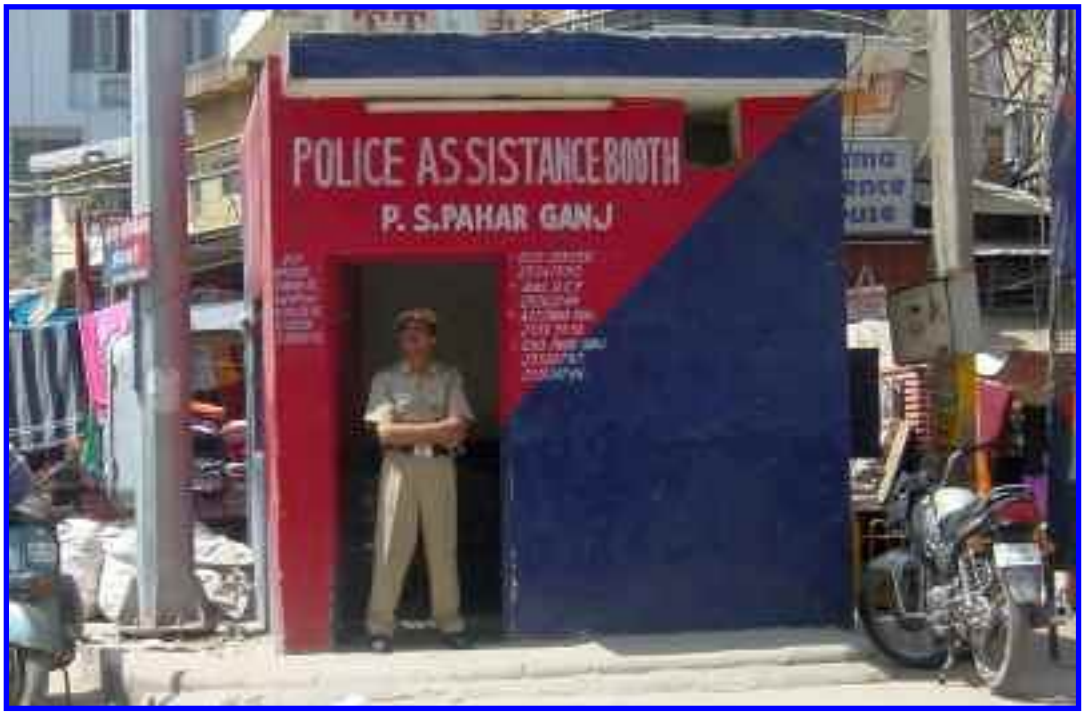
インド・マオイストの24時間バンダ

谷川昌幸(C)

CPI-Mは、22－23日、６州バンダを宣言した。マオイスト政治局員のアザド同志が、3月12日から行方不明となり、それをマオイストは治安当局による「不法拘束」とみて、釈放か公開刑事手続きを要求しているのだ。

CPI-Mによれば、もしアザド同志に危害が加えられるようなら、人民解放ゲリラ軍（PLGA)が全国で攻撃を開始する。その責任はすべて政府にある。このバンダは、11日の指導者2人の虐殺への抗議でもあるという。

以上のようなインド・マオイストの闘いは、ネパール・マオイストのそれと同じだ。南アジアのマオイストは、「南アジア・マオイスト諸党・諸組織協力委員会(CCOMPOSA: Coordination Committee of Maoist Parties and Organizations of South Asia)」など、国際連帯組織を持つが、お互い必ずしも仲が良くない。なぜなのか？　不思議だ。



デリーの交番

危険物探知機。人の集まるところに設置。地下鉄駅などを除き、たいていは形骸化し、ほとんど無意味。
19:19 | 固定リンク | この記事を引用 | マオイスト
2010/03/20

マオイストと闘うインド内務省

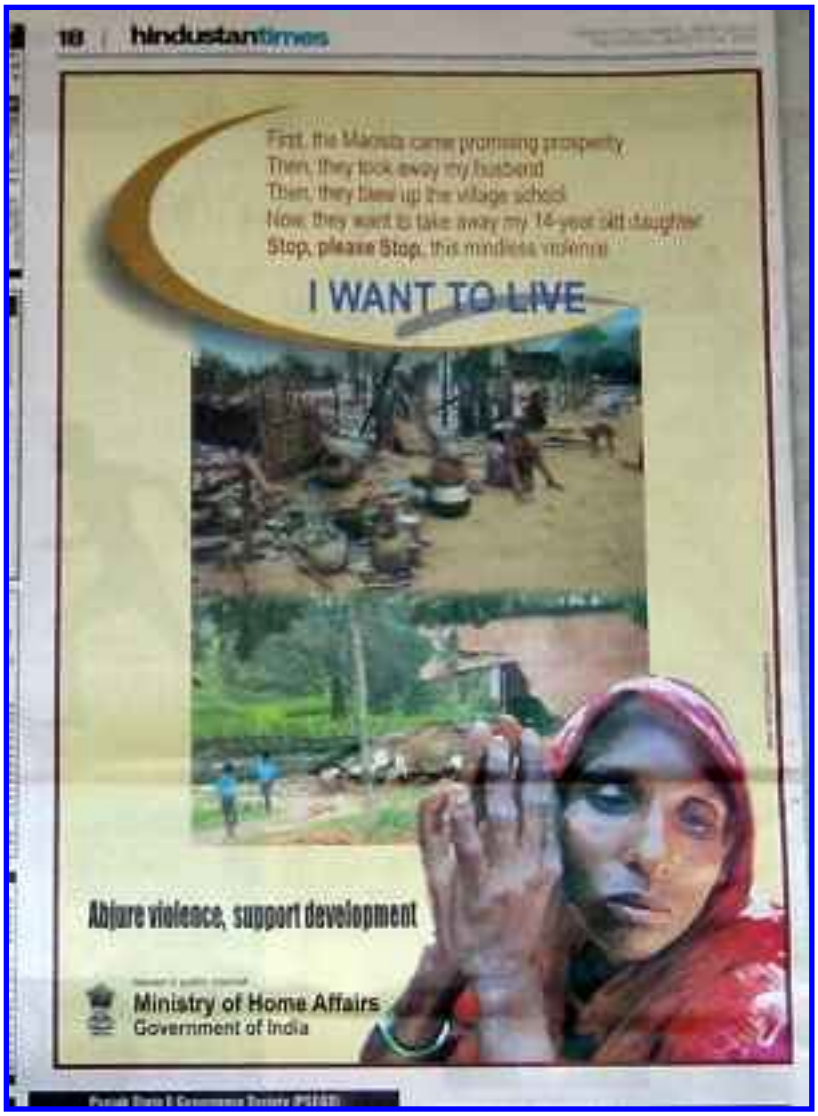
谷川昌幸（C)

今日の新聞(3/20)に、インド内務省が大きな広告を出している。

マオイストが来て繁栄を約束してくれた。
次に、彼らは夫を連れていった。

次に、彼らは村の学校を破壊した。
いま、彼らは14歳の娘を連れ去ろうとしている。
やめて、どうかやめて、こんなひどい暴力は。
私は生きていきたい。

ネパール人民戦争とそっくり同じだ。ただ、インドではマオイストは地方を部分的に支配下においても、国家権力を奪取する見込みはない。 インド人民戦争は、地方ではずるずる続く可能性がある。地方住民にとっては、ネパールよりも悲惨なことになるかもしれない。



Hindustantimes Mar20, 2010

デリー下町の木炭屋さん

18:24 | 固定リンク | この記事を引用 | マオイスト

公衆トイレと公共の観念

谷川昌幸(C)

デリーの街角には、かなりの数の公衆トイレがある。いくつか使用してみたが、悪くはない。これは、誰が、どのように管理しているのだろうか?

先述の鉄柵住宅地の場合、美しく管理され、快適だが、排他的自治であり、住宅地内公園も実際には「半公園」だ。

これに対し、公衆トイレは誰でも使用でき、名実ともに「公」のもの。これがかなりしっかり管理運営されているところをみると、いわゆる「公共」の観念が育ちつつあるのだろう。大いに期待できそうだ。

住宅・小商店混在地の公衆トイレ。前面道路は未舗装だが、付近はきれいに掃除されている。

都心部の公衆トイレ(1)

都心部の公衆トイレ(2)

上記トイレ横の露店街。

テレビ局の街頭取材中

都心部の公衆トイレ
（ラーマ・クリシュナ・アシュラム付近)
0:35 | 固定リンク | この記事を引用 | 社会
2010/03/19

ガンジーの偉大さと池田大作氏の名声

谷川昌幸(C)

ガンジーの偉大さは万人が認めるところであり、いまさら付け加えることは何一つないが、それでも何かを言わざるを得ないと思わせるのが、偉人の偉人たるゆえんである。

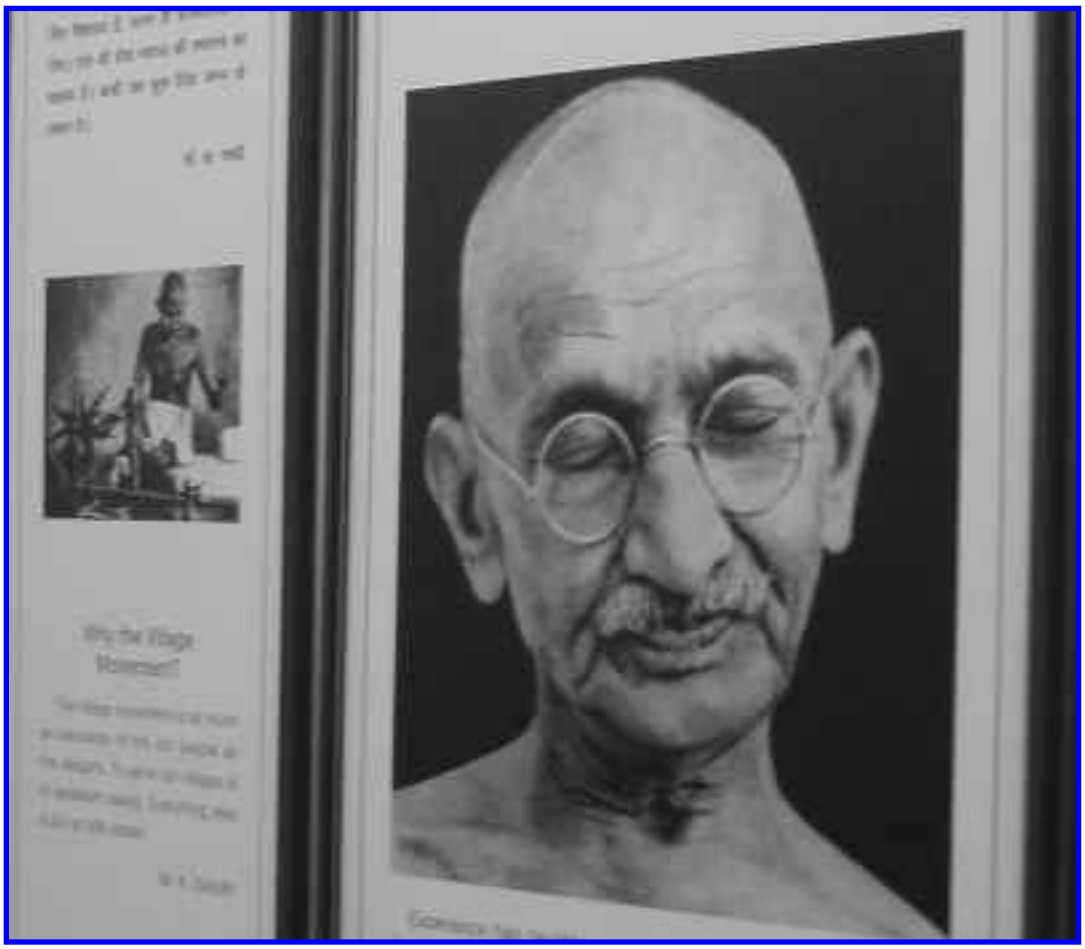
デリー市内には、ガンジー関係の記念館や公園がいくつもある。記念館は写真と文章による生涯の説明が主だ。特に工夫されているわけではないが、ガンジーその人の魅力にひかれ、いつまでも見入ってしまった。

胸像や「塩の行進」像もいくつもある。ふつう偉人像は、どことなく厭味なものだが、ガンジー像にはそのようなところはまるでない。厳しさを秘めた無限の優しさが、見る人を包み込む。 日陰から野外のガンジー像を見ていると、地方からの農民とおぼしき人々が、次々と、サンダルや靴を脱ぎ、焼けつく石畳の通路をガンジー像のところまで歩み、こうべを垂れ、敬意を表していた。自然にそうしたくなる気持ちは、外国人の私にもよくわかる。

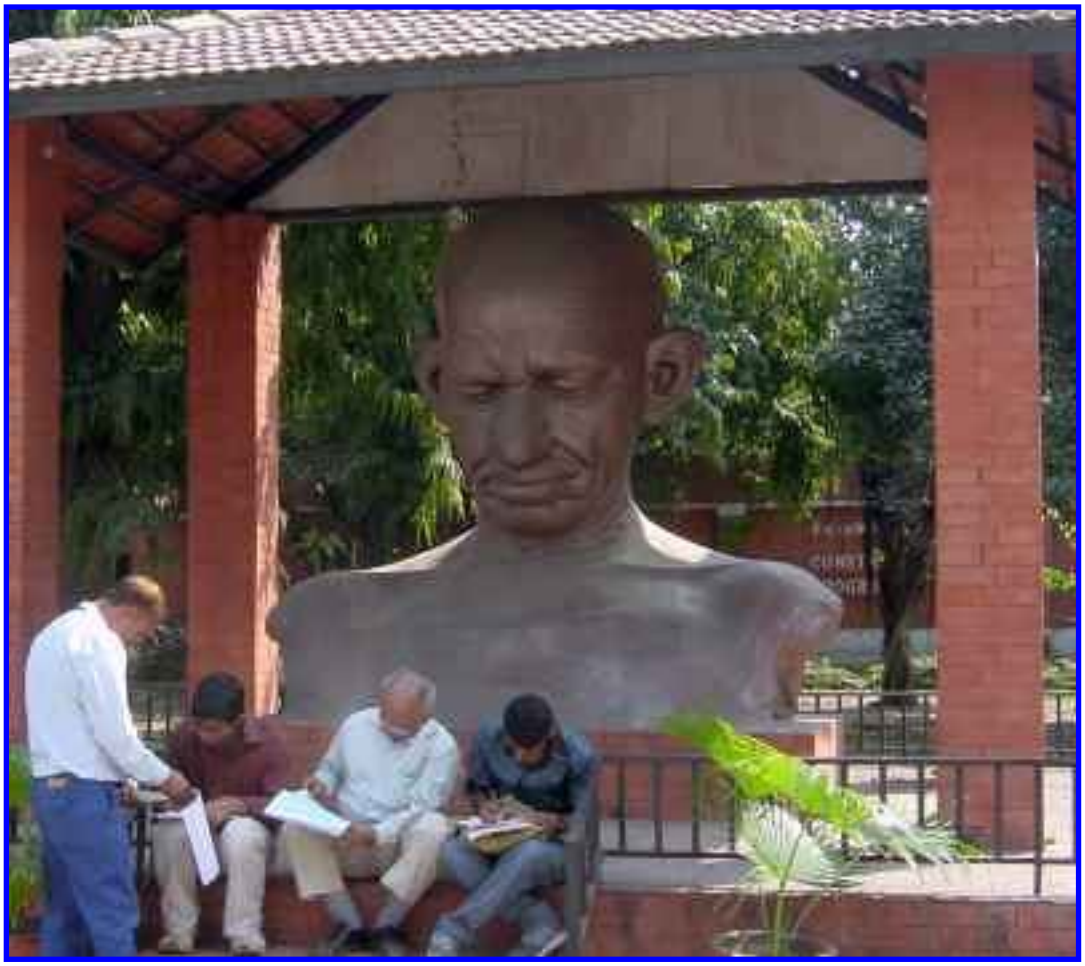
ちょっと見ただけでも、インドの広大さ、巨大さ、複雑さは、とてつもないものだ。ガンジーなくして、このインドを、このような形で独立に導くことはできなかったであろう。(インド・パキスタンの分離独立は阻止できなかったが。)

もうひとつ、ある意味で「感心した」のは、池田大作氏の平和主義者としての名声。ガンジー博物館の図書コーナーで資料を物色していると、学芸員とおぼしき紳士が話しかけてきた。「素晴らしい本がありますよ。池田大作氏の文章も入っていて、よく売れています」といって、一冊の本を薦めてくれた。

「平和主義者」池田大作氏の名は、ネパール知識人の間では広く知られている。ネパールだけかと思っていたら、インドでも日本を代表する平和思想家・平和主義者は池田大作氏なのだ。これには驚いた。



ガンジーの写真と説明文



巨大ガンジー像の前で学ぶ大学生と教師

敵をも愛したもう一人の人

1:19 | 固定リンク | この記事を引用 | 平和
2010/03/18

インド国鉄vsデリー地下鉄

谷川昌幸(c)

日曜日、英帝国支配の遺産たるインド国鉄に乗ってみた。郊外の実情見学のついでだが、ウワサに聞いていたほどアナーキーではなかった。 それでも切符売り場は無秩序そのもの。我先にと窓口に殺到し、奥ゆかしい私はいつまでたっても切符を買えない。たしかに押しが強くないとインドでは生きていけない。

なんとか切符を買い、列車に乗り込む。もちろん２等車。紅茶売り、駄菓子売り、弁当屋さん、そして物乞いをする人まで次々とくる。しかし、車内はそれなりの秩序があり、耐えられないほどではない。これなら長距離列車に乗って、半日か１日の遠方にも行けそうだ。何よりも安い。

国鉄の利用マナーは、地下鉄とは明らかに異なる。地下鉄はハードと同時にソフト(切符購入、整列乗車など）も先進国から導入したのだろう。最新式ハードだから、利用者はソフト

も受け入れようとしている。デリー地下鉄は、質において、東京、大阪の地下鉄と何ら変わりはない。 多文化の本家インドといえども、近代的合理性の普遍的価値には抵抗できないようだ。

共同井戸。付近の水道水は塩辛かった。塩害か?

催事屋さん

11:51 | 固定リンク | この記事を引用 | 社会
2010/03/17

美しく管理されたデリー大学

谷川昌幸(C)

デリー大学は多くの学部を擁する総合大学であり、地下鉄駅前の広大な北キャンパスには教育学部、法学部、社会科学部、芸術学部、生物学部などがある。

生物学部となりには、熱帯植物園のような広い庭(公園)があり、色鮮やかな様々な花が咲き乱れている。木陰で寝転がっていると、デリーの喧騒を忘れてしまう。

中央図書館と芸術学部の間の庭も手入れが行き届き絵葉書のように美しい。学生たちがあちこちの木陰でおしゃべりをしたり、本を読んだりしている。中央図書館は、雑誌類もたくさん入っており、蔵書管理もきちんとしているように見えた。

デリー大学は、ネルー大学と同じく広大で美しいが、見て歩いた限りでは、共産党やマオイストのビラやスローガンはどこにもなかった。「民主主義の壁」まで設置されているが、ここにもそれらしきビラは張られていなかった(設置者・設置理由不明)。 好みの問題ではあるが、いわゆる「過激派」の不埒なビラひとつない大学は、どことなく不自然な感じがする。

教育学部

生物学部となりの公園

中央図書館

社会科学部

法学部。看板はコンサート(?)宣伝

声なき「民主主義の壁」

3:25 | 固定リンク | この記事を引用 | 教育
2010/03/13

ジハードより危険なマオイズム：インド内務相

谷川昌幸(C)

デリーの街を歩いていると、やたら「鎌と槌」ワッペンを着けた地方出身らしき人々に出会う。旧デリーではあちこちでデモをやっていたし、ヒンズー寺院やイスラム寺院にも共産党ワッペンを着けた団体が指導者とおぼしき人に引率され大挙して入っていくのが見られた。

共産党員がこんなことをしていいのかなぁ、と不思議に思っていたら、ニューデリー駅の近くの公園でインド共産党（CPI)が大集会をやっていた。どうやら、その集会参加者が、集会をさぼりデリー名所見物を楽しんでいるらしい。ほほえましい。

これとは対照的に、今朝の新聞によると、内務大臣が「ナクサリズムはジハード・テロリズムより危険だ」と、物騒な発言をしている。政府はマオイストとを一掃するため必要な武力を行使する権利があるという。

マオイストは、２００の郡(district)で勢力を持ち、34郡はその支配下にある。内務相によれば、マオイストは国家との戦いを宣言し、開発に反対している。マオイストが貧困層の味方だというのは真っ赤な嘘だという。かつてネパールで聞いたような話だ。

そうした中、昨日早朝、マオイストの指導者2人が警官隊に射殺された。デリーで報復攻撃がなければよいが。 不思議なのは、このような大事件があったというのに、新聞ではマオイスト問題の扱いが小さいこと。国が巨大なので、マオイストも諸問題の一つということなのだろうか。

ニューデリー地下鉄駅前

小規模商店会　役員名簿

20:23 | 固定リンク | この記事を引用 | マオイスト

鉄柵の地域自治

谷川昌幸(C)

デリーの街を見て驚いたのは、鉄柵で囲い込んだ住宅地があることだ。５０ｍ×１００ｍくらいの地域が高さ３ｍくらいの鉄柵で囲まれ、その中へは数か所のゲートから入る。車が入れるのは一か所のみで、他は人がかろうじて通れるくらいしか開いていない。これらのゲートは夜間は閉鎖され、通行できない。

日本では塀で住宅を囲むが、ここでは区域全体を鉄柵で囲んでいる。まるでベルリンの壁、パレスチナの壁のようだ。アメリカでも富裕層が住宅地を柵で囲いこみ、貧乏人や不審者を入れないようにすることがはやり、社会問題になっている。デリーでは、それと同じことが早くから行われていたようだ。

この鉄柵の街がどのように運営されているかは見ただけではよくわからないが、看板から想像するに、一種の地域自治となっているようだ。鉄柵内はきれいに掃除され、広場もあり、2，3名の警備員が棍棒を持って見張りをしている。そのおかげであろうか、路上では子供たちが屈託なく遊び、広場では若い女性が一人で読書していた。鉄柵内の住民が金を出し合い、この地域を管理しているのだろう。

しかし、鉄柵にはどことなく後ろめたさを感じざるを得ない。鉄柵に守られた自由と安全と幸福――それは軍隊に守られた国民国家のミニチュアを見せつけられているせいかもしれない。お前も同じことだよ、と。

鉄柵住宅地入口

午後11時から朝6時まで閉鎖

鉄柵住宅地内の広場

13:51 | 固定リンク | この記事を引用 | 社会
2010/03/12

治安コスト：厳戒デリー地下鉄

谷川昌幸(C)

インドの経済発展は目覚ましいが、その一方、この国のコミュナル紛争は深刻で、そのために負担せざるを得ない治安コストは想像を絶するものがある。

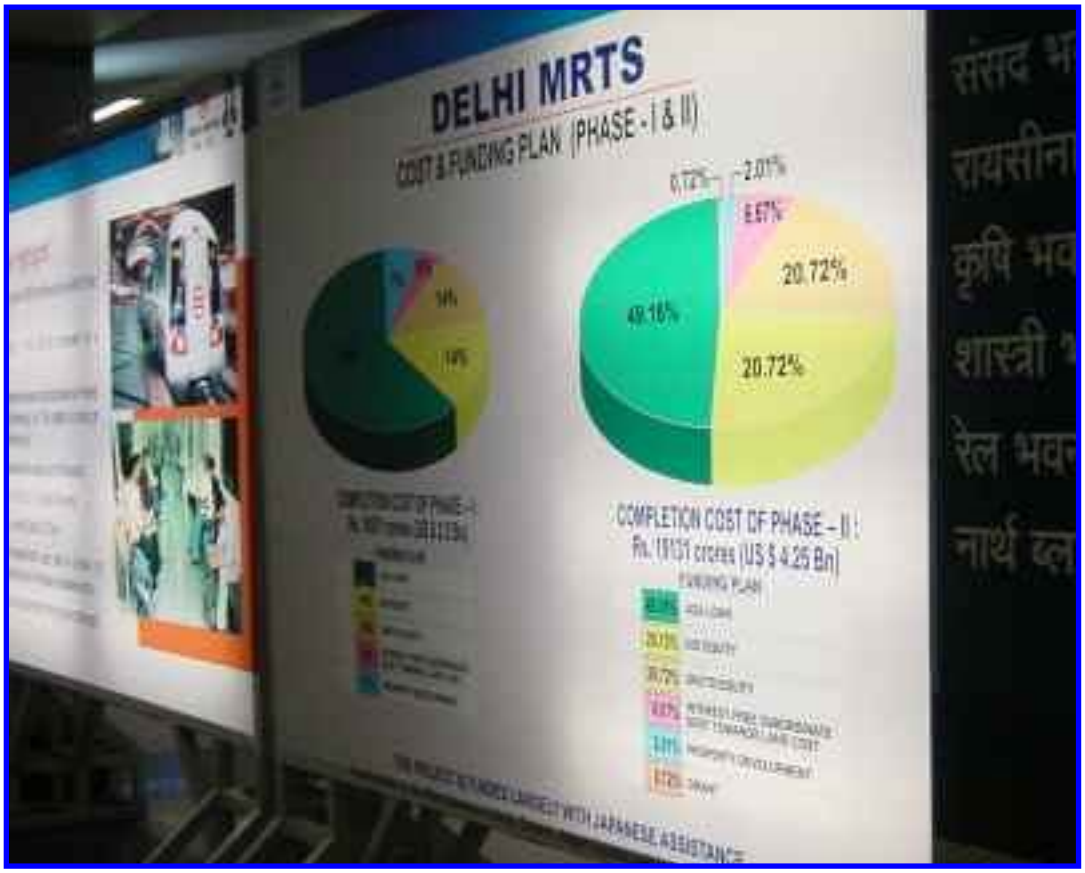
驚いたのは、地下鉄で空港とまったく同じセキュリティ・チェックを実施していること。乗車券(8ルピーから)を買い、それを持って男女別に身体検査を受け、荷物を透視装置に通す。飛行機に乗るときとまったく同じだ。これを地下鉄の全駅で、全乗客に対して実施している。

駅周辺や構内には小銃を構えた兵士が相当数配備され、駅構内には土嚢さえ積んで警戒している。大変な治安コストだ。

この地下鉄は、日本の開発援助で建設されている。宣伝下手の日本なので援助看板を見たのは終着駅Central Secretariat構内だけ（他にもあるだろうが）。車両も軌道も施工がどの国のどの企業かはわからないが、乗り心地は日本の最新地下鉄と何ら変わりはない。快適だ。

乗車マナーもそれほど悪くない。10数年前の大阪より、はるかに上品だ。インド史には疎いが、英帝国が早くに鉄道網を建設したので、キューを守る英国紳士の道徳もある社会層以上の人々には体得されており、それが庶民にも及び始めたのかもしれない。特に都心のラジブ・チョーク駅はマナーが良く、キチンと長い列を作って列車をまち、整列乗車している。

近代的システムには比較的早く人々は慣れ親しむ。ダメなのは、お役所。ネルー大学を見て回ったが、事務室はネパールでもおなじみの乱雑さ。これでよく学校事務がやれるなぁ、と感心したものだ。上部構造は下部構造の変化になかなかついていけないらしい。



日本開発援助の図解説明板(Central Secretariat St.)

日本開発援助マーク（同上）

高架駅と駅ビル。日本の駅前とよく似ている。しかし、この写真左下枠外のところでは兵士が小銃を構え駅を警戒していた。駅は撮影禁止かもしれないので、遠方から兵士も入らないように撮影。

0:48 | 固定リンク | この記事を引用 | 社会
2010/03/11

社会主義健在：ネルー大学

谷川昌幸(C)

ネルー大学は春爛漫。ブーゲンビリアや名も知らぬ花々が咲き乱れ、学生食堂で昼食後、木陰でうとうと昼寝していると、地上の天国のようだ。

社会主義にとっても、ネルーの名を冠したこの大学は、わが世の春らしい。学内バス停には「働かざるもの食うべからず」というマルクス(聖書？)の標語が書きつけられ、校舎の壁には社会主義をたたえる芸術的なスローガンがいたるところに掲げられている。

社会主義の春爛漫。ここは別天地だ。

ネルー大学構内バス停

学生組合看板

学生組合看板

政治学部エントランス
ナクサルバリも元気

政治学部主催パルタ・チャッタジー講演会、ゲバラも歓迎。講演会は満員の盛会であった

11:41 | 固定リンク | この記事を引用 | 教育
2010/03/10

33%賃上げ：デリー

谷川昌幸(C)

インドの好景気は、労働者にも波及し、今日の新聞ではデリー地域の最低賃金が３３％引き上げられた(前回は2008年3月)。インフレとはいえ、これはすごい。

非熟練労働者：	２０３Rs／日	５２７２Rs／月
半熟練労働者：	２４８Rs／日	６４４８Rs／月
Matriculate：		６４４８Rs／月
大卒：		７０２０Rs／月

街を見て歩くと、工事現場でも商店でも大衆食堂でも、みな忙しそうに働いている。これだけのエネルギーで、よく働けば、21世紀はおそらくインドのものとなろう。

郊外の地下鉄建設現場

リキシャ式舗装装置一式

14:39 | 固定リンク | この記事を引用 | 経済
2010/03/09

建設ラッシュのインド

谷川昌幸（C)

デリーは建設ラッシュ。道路を掘り返し、歩道や上下水道整備、地下鉄工事などをやっている。ビルの新築や改築もいたるところで見られる。

建設方法は新旧混在。最新重機もあれば、土砂をカゴに入れ、頭に乗せて運んだりしてい

る。絵にはなるが、重労働だ。日当はいくらくらいだろう。

びっくりしたのは、中国企業。官庁街近くで超巨大ビルを中国企業が建設している。中印も「対立」から「競争」の時代に入ったのだろうか。

砂利を運ぶ女性労働者　コンノートプレイス

中国企業による巨大ビル建設　官庁街近く

12:04 | 固定リンク | この記事を引用 | 経済
2010/03/08

インドは「女性の日」

谷川昌幸(C)

７日、エア・インディア（AI)で関空からデリー着。面白かった。関空でAIに乗り込むと、もう完全にインドの世界。中古エアバスで座席カバーは破れ、、金具は取れ、シートベルト着用サインですら、いくつか点燈しない。スチワーデス(アテンダント)さんはにこりともせず、スナックを放り投げる。安全運航の基本さえしっかりしておれば、あとは適当でよいという、見事なインド式合理主義だ。SQやTIAもよいが、日本式サービスの対極にあるインド式合理主義はもっともっと学ばれてよいだろう。

８日朝、「タイムズ・オブ・インディア」をみると、きょうは「女性の日」。上院には女性３３％クォータ制が提案されており、午後５時ころには投票らしい。成立すれば、「歴史的」快挙とのこと。インドもネパール同様、「歴史的」が好きらしい。

インドは、世界最大の民主政治。進行中のさまざまな「画期的」改革が成功すれば、経済ばかりか政治でも、２１世紀はインドの時代になりそうな気がする。

21:50 | 固定リンク | この記事を引用 | ニュースと政治
2010/03/07

マオイストTシャツ

谷川昌幸(C)

ネパールでは、マオイストTシャツがはやり始めたらしい。次回訪ネの際は、ぜひ買い求め、着て帰りたい。入国拒否されるかな？

Eikyabadyata(Revolution in SA, Mar2,2010)

0:31 | 固定リンク | この記事を引用 | 社会

2010/03/06

ネパール派兵、７月末まで延長

谷川昌幸(C)

日本陸軍(Japanese Army)のネパール派兵が４ヶ月延長され、７月末までとなった。UNMIN任期は、安保理決議(1909)により5月15日までだから、それまでに和平がならなければ、日本陸軍が停戦監視・平和構築を一手に引き受けるのだろうか？

それはともあれ、単純化していうならば、UNMINのネパール停戦監視・平和構築には、二面性があるような気がする。人民戦争停戦に寄与している側面と、莫大な国連特需をもたらしているという側面の二つだ。

人民戦争の悲惨はいまさらいうまでもないが、これをひとまず棚上げすると、ネパールのパワーエリートたちは政治的にたいへん有能であり、老獪であるといってよい。これはネパールの伝統のたまものである。もしネパールの為政者たちが有能でなかったならば、印中間で曲がりなりにも独立を維持してこれなかったはずだし、また紳士的でエゲツナイ英帝国主義の植民地支配から免れることもできなかったはずだ。

そのネパールの有能なパワーエリートたちにとって、社会構造激変期に、平和構築を名目に、国連をネパールに引き込んだのは大成功であった。どこまで意図的かは分からないが、事態の推移そのものを見ると、彼らは和平交渉をズルズルと引き延ばし、そうすることによって国連にネパールで際限なく金を使わせようとしている。そして、国連が金を使えば使うほど、権力エリートたる彼らも潤うわけだ。もちろん、紛争を利用して私腹を肥やすよう

なことをやりすぎると、紛争被害者たちが怒るので、ときどき「UNMINの無能」を非難して、矛先をかわす。国連が無能だから、和平が進捗しないのだ、と。

国連は、もちろん、このぼったくり構造に気付いている。だから、そのつど不快感を示してきたし、また今回はよほど腹に据えかねたらしく、UNMIN延長を５月１５日までとしてしまった。この期限までに人民解放軍統合をすすめ和平のめどを付けなければ、あとは知らないよ、ということらしい。（また延長ということになれば、ネパール政治家の有能さがまたまた証明されることになる。）

しかし、困ったことに、意地悪な見方をすれば、UNMINの方も、一面では、紛争で飯を食っているといえなくもない。平和構築支援をしてやっている当のネパールから「無能だ」とか「マオイスト贔屓だ」とか嫌みをたらたら言われ、あほらしいと思いつつも、世界でもっとも安全な平和構築現場たるネパールに居残り「実績」を上げたいというのが本音だろう。

わが日本国陸軍にとっても、ネパールのような安全な国で海外派兵訓練ができるのは願ってもないことだ。陸軍のイメージアップにも役立つ。すでに、ヒマラヤ、寺院、素朴な村人と子供たち、ゾウなどがネパール派兵宣伝に効果的に使用されている。個々の派兵隊員は苦労されているかもしれないが、日本陸軍としてはもっと居続けたいというのが本音であろう。

要するに、ネパール・パワーエリートも国連諸機関も日本陸軍も、人民戦争のドンパチは危険だし世間体もあり困るが、今のような停戦状態であれば、必ずしも自分たちの利益に反することにはならないのだ。

ネパールのパワーエリートたちは、政治家としてきわめて有能である。それにもかかわらず、和平交渉が進捗せず、新憲法の制定も遅れそうなのは、彼らがそれを望んでいないからに他ならない。

これはいわば紛争に依存する「紛争産業」である。これを廃業させるには、世界と日本の納税者たちがネパール庶民と連帯し、「紛争産業」への資金の流れに異議を申し立てるしか方法はあるまい。

はじめに述べたように、国連停戦監視・平和構築支援には二面性がある。ここでは、あえて意地悪な見方をし、その一方の側面のみをグロテスクなまでに誇張してみた。
17:47 | 固定リンク | この記事を引用 | 平和
2010/03/04

社民党とネパール

谷川昌幸(C)
社会民主党機関紙『社会新報』(3/3)が，ＷＨＲ（寡婦人権団体）での活動報告会（アジア資料センター主催）の記事を掲載している。社民党は以前からネパールの人権，平和問題に関心を示し，以前にも『社会新報』でネパール記事を読んだ記憶がある。日本財団の一連のネパール記事とあわせて読むと，興味深い。

記事によると，報告会で発表したのは，青年海外協力隊員としてＷＲＨに派遣されていた与那嶺涼子さん。報告によると，ＷＨＲは会員４万４千人，そのうち紛争寡婦３９０７人，ダリット７７４０人。講演では，国軍と人民解放軍の狭間で苦しめられた村人たちや，マオイストの徴兵のため大黒柱の男子の身代わりとして人民解放軍に入れられた女性たちのこと，あるいは寡婦と再婚すると５万ルピー支給，ダリット女性と結婚したら１５万ルピー支給といったユニークな補償制度など，興味深い報告があったという。

このような報告に，社民党など，日本の左派政党が関心を持つのはよいことだ。

ネパールについては，これまでは保守系の方がはるかに熱心だった。保守系の人々は，かつて国際的非難の最中，皇室－王室つながりで，パラス皇太子を日本国皇太子夫妻と会見させたりした。現在でも，保守系あるいは右派の方が対ネ工作は活発だ。自衛隊も海外派兵実験場としてのネパールに大いに関心を示している。

これに対し，最近の日本左派は内弁慶で，外国の労働者・人民との連帯にはあまり関心を示さない。 しかし，これはおかしいのではないか。左派は本来インターナショナルのはず。だったら，社民党や日本共産党などは，もっともっとネパールにも関心を持ち，ネパールの労働者・人民との連帯を図るべきだろう。

THE SHAKAI SHIMPO

ネパールの紛争とジェンダー正義

～紛争で夫を亡くした女性たちの「癒し」と権利～

夫が死んでも何の補償も
WHRが職業訓練などを

19:45 | 固定リンク | この記事を引用 | 政党
2010/03/01

ノルウェーとネパール：表現の自由をめぐって

谷川昌幸(C)

ノルウェーは北欧の小王国。人口は約４８０万人で，福岡県とほぼ同じ。生活水準は世界最高（人間開発指数：世界１位）であり，国際社会でも人権，平和の分野を中心に大きな存在感を示している。ネパールでも，ノルウェーは平和構築などで活発に活動している。そのノルウェーとネパールの表現の自由について比較分析した小論文を送ってもらったので，読んでみた。

Tone Bleie and Dev Raj Dahal, Defending and Explaining Freedom of Expression: A Comparison of Norway and Nepal.

驚きは，なんといっても，「表現の自由」といった基本的自由権について，ネパールがノルウェーと比較されていることだ。グローバル化のおかげで，ネパールはついにノルウェーと同じ人権論の土俵に乗ったのだ。

論文によると，ノルウェーでは，社会の多文化化が進み，文化的権利・集団の権利と表現の自由との対立が深刻化してきた。たとえば，最近ノルウェーの新聞にムハンマドの名を付けた豚のイラスト付記事が出た。これについて，表現の自由の限界をめぐる激しい論争が起きている。

また，ノルウェーでは，Heritage Foundation（米），Adam Smith Institute（英）などのシンクタンクの影響力が強まり，議会や政党の機能を蚕食しているのではないか，と問題視され始めた。

これに対し，ネパールでは，様々な援助機関が大きな力をふるっている。ノルウェーではシンクタンクが「金の力をイデオロギーの力に変える」役割を果たしているのに対し，ネパールでは援助機関が「金の力を政策に変える」役割を果たしている。

「議員，党活動家，援助依存組織は，きそって援助機関の本やレポートを読み，セミナーや訓練に出席し，まったく異なる状況下の問題を解決するためにつくられた諸理論を必死になって輸入している。」

著者らは，こうした内外の専門家に依存し，普通の市民の声をないがしろにするやり方は，誤りだという。そして，こう助言する。

「ノルウェー，ネパール両国において，専門家の優位が民主主義をむしばんでいる。ノルウェーではシンクタンク，ネパールでは開発専門家・紛争問題専門家がそれだ。」

しかし，制憲議会が開かれているいまはチャンスだという。著者らは，いまこそ普通の市民が表現の自由を行使し，意見を言い，そうすることによって伝統的な政治や文化を改めていくべきだと主張する。

この議論は正論である。しかし，あまりにも正論すぎて，にわかには信じがたい感じがしないではない。これは「普通の市民」の根拠なき理想化なのではないか。そもそも，ネパールにはノルウェー人がイメージするような「市民」がいるのか？　もし「自立した市民」を想定し，表現の自由を主張しているのなら，それこそ西洋理論の押しつけ，ということになる。これはじっくり議論するに値する論点だ。

私自身は，民主主義懐疑論者であり，むしろエリート理論の有効性を信じている。ネパールにいま必要なのは，市民の自由な議論というよりは，むしろ国益に奉仕する本物のエリートなのではないだろうか？

次回，訪ネの際，お二人にお目にかかり，この点につき，議論してみたいと思っている。
20:43 | 固定リンク | この記事を引用 | 文化

2010/02/27

大量失業と排外ナショナリズム

谷川昌幸(C)

高卒の就職が極端に悪化している。沖縄46%，長崎75%(朝日2/24)）。これは大卒も同じで，たとえ内定を得ていても，相当数が不本意内定や限りなくパートに近い内定だ。西欧が一足先に突入し苦しんできた若者大量失業の時代に，日本も突入した。

グローバル化で人の移動が自由化されると，カネ・モノと同じく，人材（人間材料，人間資源）も自由に取引される。ネパールからも，大量の研修実習生がやってくる。月給５万円で働いてくれるとすると，企業は当然，日本の高卒や大卒は採用しない。資本主義の論理からいえば，極めて合理的な選択だ。

こうなると西欧で起こったことが，それ以上に極端な形で日本でも起こるのではないかと危惧せざるを得ない。外国人排斥ナショナリズムの高揚だ。

たしかに，英独仏どこでも外国人労働者を便利に使い，自国青年大量失業を引き起こし，排外ナショナリズムの勃興をもたらした。しかし，世界帝国の遺産を持つイギリスは異民族の扱いには慣れており，まあまあ・なあなあのイギリス経験論で常識的に妥当な解決を見いだしつつある。フランスも，さすが革命の本家，一線を越える前に理性の抑制が利き，それを押しとどめている。これに対し，ドイツはかなり危ういが，それでもナチスの苦い経験と真正面から向き合い，批判克服してきたので，ネオナチが国民世論を牛耳るようなことにはなるまい。

危ないのは日本。このままでは，日本の失業・半失業青年の鬱積した怒りは，排外ナショナリズムへと流れ込み，外国人労働者攻撃を引き起こすことになるだろう。

外国人労働者を雇用するのであれば，日本人と同じ条件で雇用すべきだ。法外放置のような差別的雇用は，外国人労働者にとっても日本人労働者にとっても不幸なことであり，悲惨な結果を招くことになりかねない。

11:14 | 固定リンク | この記事を引用 | 経済

2010/02/21

信仰の自由なき研修実習生

谷川昌幸(C)

いまどき，こんなことが許されてよいのか！　日本では，外国人研修実習生は法外に放置され，信仰の自由さえ奪われている。

朝日新聞記事「あふれる悩み，教会急増」(2/21)によれば，中国人研修実習生を受け入れている東北の水産協同組合は，中国の送り出し機関との間で，「宗教活動を禁止する」という契約を交わしている。これにより，その水産協同組合は，近くのキリスト教会に通い始めた研修実習生に，次のように通告した。

・教会に行ったら，帰国させる

・保証金は没収する
そして，その研修実習生は――
・休日にも港町の外に出ることは禁止
・手紙の差出人チェック
という扱いを受けている。身体の自由も信仰の自由も奪われ，通信の秘密さえ侵され，債務で縛られている。まさに「債務奴隷」だ。

日本国憲法第20条　信教の自由は，何人に対してもこれを保障する。

これは最強の権利保障だ。日本人だけでなく，国内のすべての人に保障されている。研修実習生にももちろん保障されている。もし朝日記事が正しいとすれば，この水産協同組合は憲法違反であり，訴訟になれば，間違いなく敗訴する。

ネパール人研修実習生の仲介業者の中にも，この水産協同組合と同じようなことを堂々と宣伝しているところがある。明白な国際人権法違反であり，日本国憲法違反ではないか。こんなことが許されるわけがない。